

大谷地区そして大谷石文化の発展を考える ～伊豆石に関する視察を通して～

Considering Development of Ohya and Stone culture

西 山 弘 泰 (宇都宮共和大学 専任講師)

本稿は、2021年2月に実施した伊豆半島への視察で得られた知見を通して、大谷石や大谷地区の今後のあり方を検討した。視察では、伊豆半島で産出される伊豆石の石丁場や建築物などを見学した。また、伊豆石の文化を活用し、地域活性化を目指す団体との交流を行った。伊豆石は、凝灰岩系の軟石と安山岩・玄武岩系の堅石に分けられ、前者は現在採掘が途絶えている。軟石の文化を掘り起こし、まちづくりに活かそうと活動している伊豆石文化研究会では、任意団体ながら活発な調査、研究、情報発信を行う一方で、全国的なネットワーク構築を目指している。近年、石文化が見直され、石を通したまちづくりの機運が高まっている。大谷石や大谷の魅力をより発信していくためにも、石のまちによる一層の連携と組織づくりが必要である。

キーワード: 伊豆石, 伊豆半島, 大谷石, 大谷地区, NPO 法人大谷石研究会, 伊豆石文化研究会, ネットワーク

1 はじめに

宇都宮市内には、石造りの蔵や塀、擁壁などを中心にした、全国の中でも特異な石造景観が形成されている。その景観の源となっているのが、市内中心部から西に8kmほどの距離にある大谷とその周辺地区である。ここでは、凝灰岩の一種である大谷石が採掘され、現在(2019年)でも7社が採掘を営んでおり、主に内外装材として全国に石材が出荷されている(安森, 2019)。しかしながら、大谷石の採掘は、1973年の89万トン进行ピークに、2018年には約1万トンと大幅に減少している(吉野, 2020)。また、コンクリートなどの新建材の普及によって、住宅や塀、土留めなどに大谷石が利用される機会が大幅に減ることで、大谷石の景観が宇都宮から失われつつあるのが現状である。

そのような中、2018年に大谷石文化が日本遺産に認定されたことは、市民が大谷石文化の素晴らしさを知る契機となった。宇都宮市(2020)、『市政に関する世論調査』では、市民の5割

が大谷石文化の日本遺産認定について「知っている」と回答しており、行政の広報活動などが功を奏していることが伺える。また「大谷石文化を誇りに感じるか」という質問項目について、「感じる」が33.6%、「やや感じる」が34.9%、「あまり感じない」が21.1%という結果であった。この結果をみると大谷石文化を誇りと感じている市民が約7割に達しているようにも感じられる。しかし、筆者はこの数値が大谷石景観の保護に結びついていたり、市民がかけがえのない地域資源と捉えていたりしているとは考えていない。市民の多くが大谷石景観を維持し、他地域の人々に誇りを持ってその魅力について語るができるようになるためには、より一層の情報発信が必要である。

近年、日本においても石文化について、関心が高まる兆候がみられるようになってきた。例えば、NHKの人気バラエティー番組「ブラタモリ」では、司会を務めるタレントのタモリが番組中に岩石について言及する場面が多く放送されている。また2018年4月29日にNHKスペシャル「シリーズ大江戸 第1週「世界最大！！侍が築いた“水の都”」」の放送では、当時世界最大の人口を誇った江戸成立の基礎は、伊豆半島で切り出された石材にあったことが紹介されている。これらの番組は、日本が近代化を迎える明治期以前にも、日本では石が都市開発に重要な役割を果たしていたこと、そして日本が木の文化だけではなく、石の文化に支えられていたことを如実に物語っている。

確かに島津（2007）が述べているように、石の建築物が主役のヨーロッパに比べ、日本において石は建築物の土台に利用され、脇役である。また多雨温暖な気候により草木が繁茂し、露頭が覆われ、岩盤を目にする機会も少ない。しかし、古来より建築物では土台や石垣、敷石、石段に、信仰や宗教では環状列石や古墳、石造、墓石に、そして身のまわりの道具では砥石や碁石、宝石などに利用されてきた。つまり日本は木の文化であると同時に、その木の文化を支えたり、補ったりしているのが石なのである。

以上のように、日本でも長きにわたって石が多方面で利用され、石の文化が形成されている。近年では、「房州石シンポジウム（富津市）」や「石のまちシンポジウム（宇都宮市）」などのように、地元で産出される、もしくはかつて産出されていた地場石材を地域活性化の観点から見直そうとする動きが全国に広がっている。また、大谷石文化の日本遺産認定以外にも、104件（2021年時点）中、6件¹⁾が石文化に関連した日本遺産となっている。このことから、近年日本各地で産出されていた石やそれによって生み出された文化が注目を集めており、日本を代表する石の街宇都宮の活性化にとって、千載一遇のチャンスが到来している。

以上のように、大谷地区にはまだまだその価値が認識されていない石文化が数多く眠っている。こうした石文化をまずは地元の住民が認識し、守り育てていくことが、当地における活性化のカギになると考える。そこで本稿では、他地域における石文化の調査・研究、利用の事例をもとに、いかに大谷石の文化や歴史を大谷地区の地域活性化に結び付けていくのか検討する。

2 伊豆石の概要

本章では、2021年2月19日から21日に実施した伊豆半島への視察の結果を踏まえ、伊豆石

について概説する。

2.1 伊豆半島の地質

伊豆石とは、伊豆半島やその周辺で産出される石材の総称である。宇都宮市やその周辺で産出される石材も、総称で大谷石と呼ばれ、かつては産出地で細かく、徳次郎石や田下石、船生石などと呼ばれていた。しかし、大谷石が凝灰岩であるのに対し、伊豆石は大谷石と同じ生成過程を経てできた凝灰岩と、マグマが冷えて固まった安山岩または玄武岩に大別される点に特徴がある。

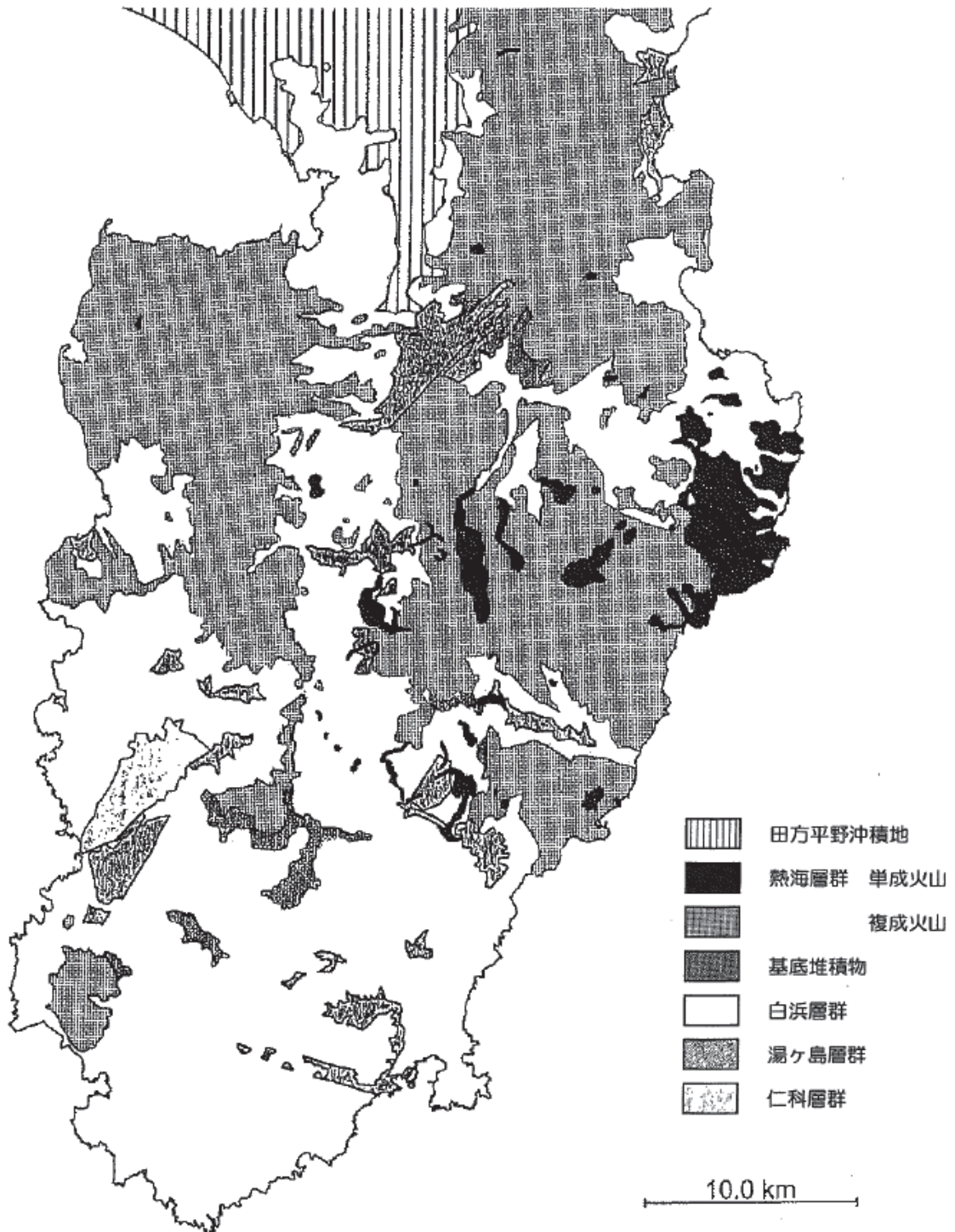


図1 伊豆半島の地質

出典：日本地質学会編（2017）『日本地方地質誌4 中部地方』朝倉書店。より転載

伊豆石は、その岩質から前者を伊豆軟石、後者を伊豆堅石と称し区別することもある。そこで以下では、二つの伊豆石を区別するために、凝灰岩系の伊豆石を伊豆軟石、安山岩・玄武岩系の伊豆石を伊豆堅石と称することとする。

どうして伊豆半島には、岩質の異なる石が産出されるのであろうか。それは伊豆半島の成り立ちに起因している。伊豆半島は、伊豆・小笠原弧がフィリピン海プレートの移動によって、日本列島に向けて北上し、約200～100万年前に日本列島に衝突したことで半島となった(町田ほか編, 2006)。そのため約1,100万年前には、本州から1,000km南に位置しており、同時に大部分が海底であった。図1は伊豆半島における地質を示したものである。伊豆半島の地質は、基部に第三紀中新世(約2,300万年前～約500万年前)の仁科層群や湯ヶ島層群がある。そしてその上に1,000～200万年前に浅海の海底火山の活動によって形成された伊豆軟石が大部分を占める白浜層群が分布する。そしてさらに上部には、伊豆半島が陸地化した200万年以降の複成火山や単成火山の活動によって生まれた伊豆堅石の層となる熱海層群が覆っている(杉山, 2015)。活発な火山活動によって、火山からは多くの噴出物が周辺に堆積したが、当地域の豊富な降水や地震活動により侵食や崩壊が進んだことで、下層基盤が露出した。それにより伊豆軟石と伊豆堅石が併存する伊豆半島特有の地質構造が生み出された(静岡県教育委員会編, 2015)。

2.2 伊豆軟石

2.2.1 伊豆軟石の概要

伊豆軟石は、伊豆半島が海底だった時代に、海底火山からの噴出物が海底に堆積し、固結、生成された。分布域は白浜層群や湯ヶ島層群が露出する南部一帯および北部中央にみられる。凝灰岩系の石材は、一般的に①加工が容易なこと、②耐熱性に優れていること、③比較的軽いことが特徴としてあげられる。一方で、比較的脆く、風化しやすい点が欠点である。2020年2月に行った伊豆半島における視察においても、黄色系、青色系、灰色系、いくつかの色が混ざったものなど、地域によって見た目や質感が一様ではなく、どのような性質や見た目のものを伊豆軟石と呼ぶのかは特に定まっていない。そのため異なった地域で産出された伊豆軟石を区別する場合は、「徳倉石」や「曾我石」「多比石」「沢田石」など、産出される地域名を冠した名前と呼ばれることもある。

2.2.2 伊豆軟石の採掘および利用

金子(2015)によると伊豆軟石の用例は、8世紀の横穴墓への使用にさかのぼるといえる。しかし、大規模な採掘、利用は、江戸時代中期以降であり、幕末期は東京湾の台場の建設にも利用された。近代に至っても用途はさらなる広がりを見せ、皇居・官庁・工場・砲台・燈台・鉄道・造船所等の建築物に利用されるなど、近代都市の造営を支えた。

図2は伊豆軟石の採掘地を示したものである。大谷石の場合、産出される場所のことを「採掘場」と称するが、伊豆石では「丁場」や「石丁場」と呼ぶ。静岡県教育委員会編(2015)によると、石丁場遺構の研究において、伊豆堅石の丁場に比べ、伊豆軟石の丁場の研究は著しく遅れている

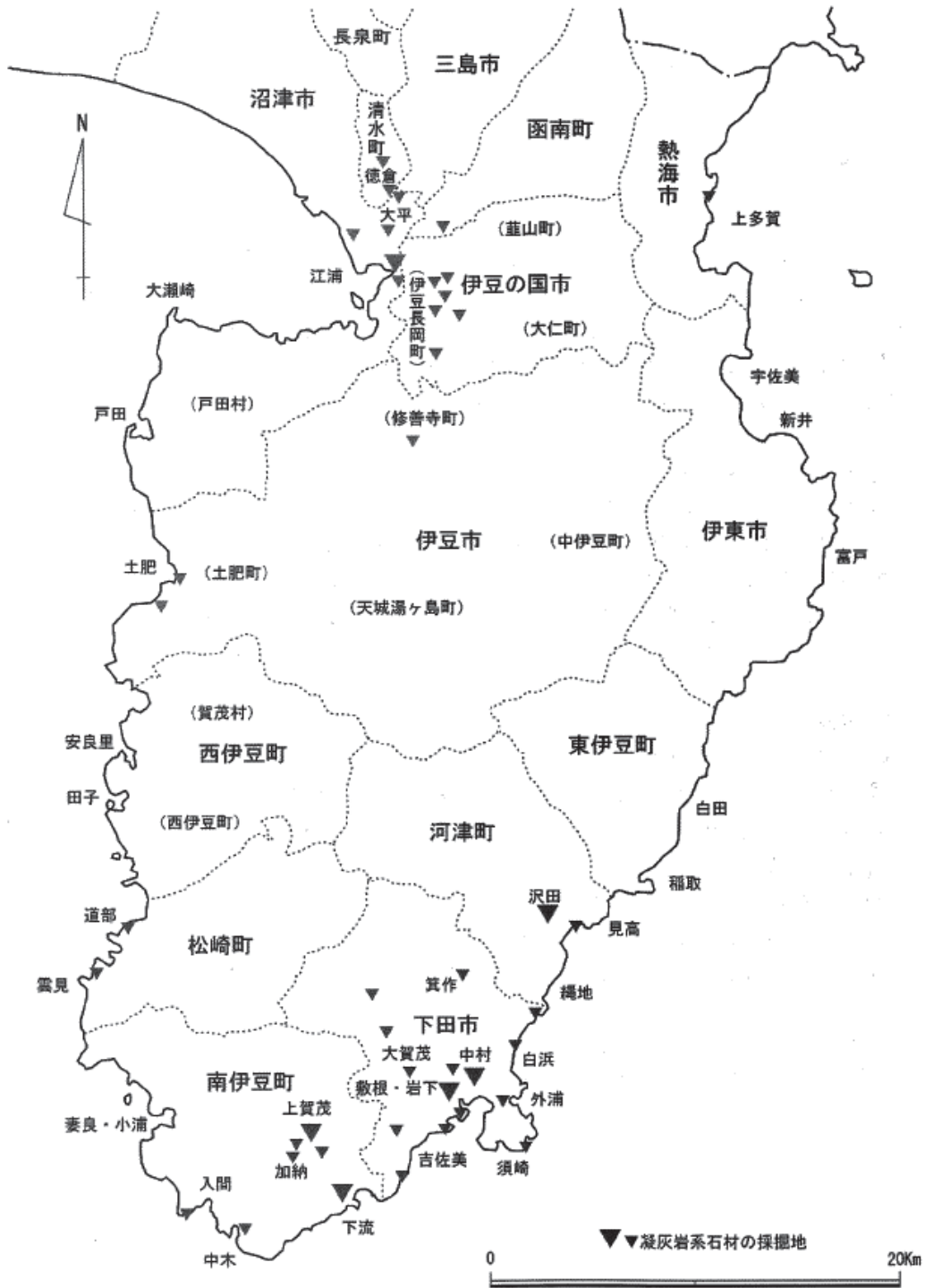


図2 伊豆半島における伊豆軟石（凝灰岩系石材）の採掘地

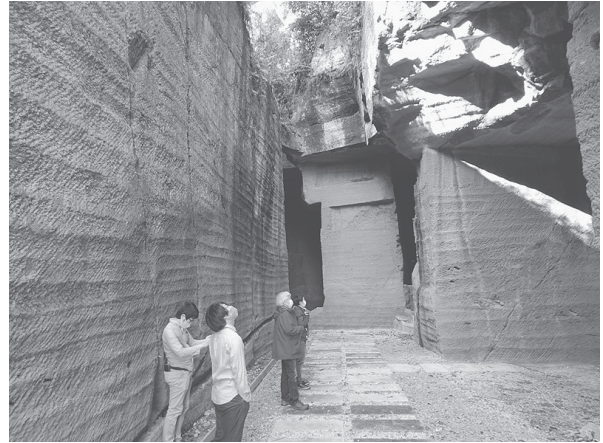
出典：静岡県教育委員会編（2015）『静岡県文化財調査報告書大 66 集 伊豆半島の石丁場遺跡』

静岡県教育委員会文化財保護課, p.82 より転載

という。そのためすべての石丁場が示されているわけではないが、伊豆石の石丁場は、図1に示された白浜層群および湯ヶ島層群の分布と重なっている。具体的な市町村名をあげると、伊豆半島南部においては、河津町、下田市、南伊豆町、北部では沼津市、伊豆市、伊豆の国市、清水町



沼津市多比地区の石丁場跡



伊豆の国市長岡の石丁場跡

写真1 伊豆軟石の石丁場

資料：2021年2月筆者撮影。

などに立地していた。視察においては、写真1にみられるように沼津市や伊豆の国市、さらには松崎町の室岩洞を訪れたが、その立地や規模、坑道の形状などは多様であった。

石丁場において採掘され搬出される際の石材の形状は、角柱状もしくは板状で、石垣や塀、土台、敷石、石蔵など、多様な利用がみられる。採掘は、それを主な生業とする者だけではなく、農閑期に周辺の農民が現金収入を得るために加わった²⁾。採掘形態は、露出した岩盤をそのまま掘る露天掘りと横に穴を掘り進める坑道掘りの2種類である。採掘技法は、かつて手掘り時代に大谷石でも用いられていたのと同様に、くさびを打ち込み割り剥がす方法をとっている。

採掘年代は、上述のように8世紀ごろからみられるが、大量に採掘されるのは江戸時代中期以降である。特に明治・大正期には地域を代表する産業まで発展し、大量の人員による採掘・輸送が展開され隆盛をみた。主な消費地は東京や横浜方面であり、建造物に留まらず鉄道、道路、港湾、河川など近代化都市基盤整備において重要な役割を果たした(静岡県教育委員会編, 2015)。また、写真2にみられるように、伊豆半島の広い地域において、伊豆軟石が用いられたと思われる蔵や商店、家屋、石塀をはじめ、土留め、トンネル、墓石、階段、石造、石柱などの建造物、土木構造物、さらには信仰や竈などの民具に至るまで、多岐にわたる利用例が確認できた。さらには、世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成遺産の一つである韮山反射炉の土台部分も周辺で産出された伊豆石が用いられている。伊豆半島より西側の地域では、舟運や鉄道路線によるつながりによって、静岡市や磐田市、遠くは浜松市などに伊豆軟石でできた石蔵がみられる(土屋, 2020)。

石材の輸送は、江戸期において海上輸送が主であるが、内陸の石丁場から海までは馬(馬車)や人力もあったという³⁾。一方、明治期以降は、海上輸送に加え鉄道輸送も加わり、大量かつ迅速に消費地に石材を運搬するシステムが構築され、消費地はさらに拡大していった。



沼津市原地区の組積造石蔵



下田市ペリーロードの商店と石蔵



沼津市西浦久連地区の石塀



沼津市多比のトンネル



下田市ペリーロード付近の墓石



沼津市西浦久連地区の石像

写真2 伊豆軟石が用いられた建築物等
資料：2021年2月筆者撮影。

江戸時代中期から大正期ごろにかけて隆盛を誇った伊豆軟石であったが、コンクリートの普及や大谷石との産地間競争によって次第に生産が減少し、次々と石丁場が閉鎖していった。2012年まで伊豆の国市において東海採石興業が「若草石」として伊豆軟石を採掘していたが、大雨による土砂崩れと浸水によって操業を停止してしまった⁴⁾。なお、当社は操業停止前、温泉浴場の床や公園のベンチ等のための石材を採掘していたとのことである⁵⁾。これにより伊豆軟石の採掘は途絶えることになった。

2.3 伊豆堅石

2.3.1 伊豆堅石の概要

伊豆半島で産出される伊豆石といえば、安山岩系の伊豆堅石である。というのも、伊豆堅石は、江戸城大改修の天下普請においてその大部分に用いられたことでその名を広く知られているからである。また、それに関連して2007年から石丁場の調査が各地で行われ、多くの研究蓄積を生んでいる。

伊豆堅石は、安山岩や玄武岩などの火成岩によって構成される熱海層群が露出する地域で産出される。図1でも確認できるように、伊豆半島北部に広く分布する。また、かつて熱海や真鶴といった西相模における箱根外輪山由来の安山岩も伊豆石と称され、その分布域はより広大なものとなっている(杉山, 2015)。伊豆軟石同様、伊豆堅石の産地によって「本小松石」「真鶴石」「根府川石」などと呼ばれている。耐火性に優れているとともに、風化にも強い一方で、重く堅いため加工がしづらいといった欠点もある。

2.3.2 伊豆堅石の利用

伊豆堅石は、中世の石塔などに利用されてきたが、本格的な利用は近世以降、すなわち天下普請による江戸城の大改修からである。そもそも江戸城周辺は、低地では砂泥や礫、台地では関東ローム層が厚く堆積し、近傍での石材供給が困難な地である。そのため遠方で産出された石材を舟運によって運び入れ、石垣などに利用してきた(金子, 2015)。荒川や利根川水系から石材を運搬する方法もあるが、河川舟運では大量輸送は難しい。そこで海岸線一帯において良質かつ大量の石材を供給することができる伊豆半島に白羽の矢が立った。

江戸城は徳川家康が1590年に入府して以来、約50年かけて築造された。その間、諸国の大名が動員され、石垣用の石材だけでも59万個を数える。そのうち、伊豆堅石の占める割合は8～9割と言われている。伊豆堅石の大規模な利用は、江戸城大改修に端緒を開き、大量供給と海上輸送ルートが確立されたことで、それ以降も江戸に供給し続けられた。その結果、城下の河岸・堀の護岸、橋台、上下水道、寺社や屋敷や家屋の基礎、道路、墓石など、様々な都市構造物に利用され、巨大都市江戸の礎を築いた(金子, 2007)。そのため江戸は伊豆石によって築かれたといっても過言ではない。

その他、本稿で伊豆堅石の一部として扱っている本小松石は、徳川家代々の墓石に利用されたほか、近代以降も墓石としての採掘・利用されている。また、湯河原町で採掘されていた白丁場

石（デイサイト）は、色合いの良さや花崗岩に比べ加工が容易なことなどから、近代以降日本銀行本店本館などの外装材に利用されるなど、近代建築物の建材としても用いられた。しかしながら、後者は昭和30年代に採掘を終了している（丹治，2019）。前者についても、採掘量は減少しており、2016年時点で採掘業者、加工業者合わせて約30社が残るのみとなっている⁶⁾。

3 伊豆石文化探究会の活動

2021年2月に行った伊豆半島への視察は、前述した主に近世江戸の基礎を築いた伊豆石について、実際現地に赴き自分たちの目で確かめることが目的である。その一方で、伊豆半島やその周辺において、伊豆石の文化や歴史を活用し、まちづくりを目指す団体との交流やその活動実態をつかむことも大きな目的の一つであった。本章では、伊豆半島北部を中心に伊豆石の文化や歴史を調査するとともに、それらの文化を保存、活用を目指す「静岡の風景 伊豆石文化探究会（以下、探究会）」についてレポートする。

3.1 伊豆石文化探究会の活動

探究会は、沼津市を拠点に、失われつつある静岡県の地域遺産「伊豆石」を研究し、その文化を伝えていくための活動を行う任意団体である⁷⁾。代表を務める剣持佳季氏が2019年7月に立ち上げ、現在会員数は27名（2021年4月時点）で各種活動を行っている。

代表の剣持氏は、地方国立大学で教育学部に所属し、西洋史を専攻した。卒業後、沼津市内の小学校教育論として教鞭をとる傍ら、伊豆石の調査を行ってきた。伊豆石に関心を寄せるようになったのは、大学時代のことである。課外授業で土蔵の街並みを観察した経験から、蔵に興味を持つようになる。静岡県に帰省した時、蔵を探していると、蔵が土ではなく、石で造られていることに気が付いた。「この石蔵はどのような石が利用され、どこで採れたものか」という素朴な疑問を持ったことがきっかけとなり、大学時代から伊豆石の調査を自主的に行うようになった。石蔵などの調査を進める中で、個人で動くよりも団体として活動した方がよいと判断し、当会を発足させた。

会のメンバーは、剣持氏がまち歩きの家や趣味（音楽演奏）、Facebook等でつながった個人一人ひとりを勧誘したという。会員の年齢層は、20～70代と幅広い。仕事は、建築家や建設会社社員、医師、ジオパーク認定ジオガイド、大学教員、主婦、大学生など多様である。

例会は月に1回、土曜日の19時半から1時間程度行われている。当初、沼津駅前のシェアオフィスを利用し会議を行っていたが、新型コロナウイルスの影響や遠方に住む会員の利便性を考慮した結果、2020年度からはWeb会議または対面とWebの併用に移行した。議題は会員個人や会が行った調査の計画・報告が中心である。これまで実施した事業は表1のとおりである。表の事業をまとめると、①石蔵をはじめとした伊豆石の調査・研究、②伊豆石や石蔵の情報発信（まち歩き、講演、パンフレット制作等）、③他地域の石関連団体との交流の3つに大別できる。以下では、①と③の事業について詳述する。

表1 伊豆石文化探究会の活動履歴

年月日	内容
2019.05	各人が個別に、それぞれの地域の興味ある「蔵」について調査
2019.05	FBで知り合った10数人がオンラインにより情報・意見交換
2019.08	月1改のオフ会開催を開始(第三日曜日午前)
2019.10.13-14	清水ミナトブンカサイにおいて伊豆石蔵を中心とした調査研究活動を展示・報告
2019.11.15	沼津市文化振興課、観光戦略家、まちづくり政策課に調査活動を報告
2019.12.13	「静岡の風景 伊豆石文化探究会」を設立
2020.02.29	第16回しずおか町並みゼミを主催(沼津市にて開催)
2020.03.01	町並みゼミの参加者41名中19名が伊豆石蔵・建造遺物石丁場跡を視察(沼津市多比・西浦、伊豆の国市古奈)
2020.03.25	沼津市文化センター職員を伊豆石蔵・建造物、石丁場跡を案内
2020.04	コロナ禍により月1改のオフ会をZoomによるオンライン会議に変更(第三土曜夕方)
2020.07.18	しずおか民家活用推進協議会総会において、剣持代表が講演「伊豆石文化圏の構想」
2020.08.15	沼津史談会主催で剣持代表が講演(コロナ禍により中止)
2020.1	伊豆の国市の旅館「頼朝の湯 本陣」から、伊豆石のパンフレット作りに関わる監修を委託。
2021.01.09	「次郎長生誕2020年記念事業 次郎長が夢見た清水港」にてパネル出展(コロナ禍により中止)
2021.03.20-21	宇都宮市共和大学を伊豆半島に招いてのフィールドワーク実施。

資料：伊豆石文化探究会提供資料より作成

3.2 石蔵等の調査による資源発掘事業

そもそも探究会の活動は「沼津にはどの程度石の建造物があるのか」「沼津にはどこに石の建造物があるのか」の2点からスタートしている。すなわち、前章で紹介したように、江戸城など石を送った側からの視点ではなく、送り出した側からの視点による調査が十分になされていない点に探究会の問題意識がある。つまり、伊豆石を採掘した地域で誰がどのように採掘を行い、運搬され、地元でどのように消費されていたのかを知るのが当会の大きな目標である。そのため探究会では、発足当初より沼津市を中心に伊豆石(軟石)が使われた建築物の立地調査を継続して実施している。

ユニークなのはその調査方法である。まず、会員専用のFacebookページがあり、会員は伊豆石が利用されていると思われる建築物の写真と位置情報、簡単なコメントを投稿する。それをGoogleマイマップに集約しデータベース化している。この方法には、時間はかかるが、会員がいつでもどこでも、そして気軽に調査に参加できる。筆者も探究会の正会員となり、Facebookの投稿を閲覧しているが、活発に投稿、意見交換がなされている様子が印象的であった。

調査は市内中心部からはじまり、約30棟の石造建築物が見つかった。その後、エリアを市全域に広げ調査を行ったところ、主に旧街道沿道に多く分布していることがわかってきた。2021

年4月現在、石はどこで産出され（石丁場の特定）、どのように運搬され（輸送方法と経路）、さらにはどこにどのくらい送られたのか（供給先とその量）を、古文書等を用いて解明を進めている。また2021年度の事業として、石蔵所有者へのヒアリング調査を予定している。

3.3 他地域における団体との交流事業

探究会の活動としてユニークなのは、他地域の石を利活用したまちづくり団体との交流を謳っている点である。探究会の公式ホームページ⁸⁾には「伊豆石パートナーシップ」というページが設けられ、そこには以下のような記述がある。

当会は、各地の石文化に関係する団体と連携をはかっていきます。当会の活動にご賛同いただける団体には、「伊豆石パートナーシップ」の認定証を発行し、お互いに情報交換する体制を作りたいと考えております。「伊豆石パートナーシップ」の輪を広げ、石文化の魅力を日本中に、そして世界に発信しましょう。関連諸団体のご参加をお待ちしております。

その他、当ページに掲載されている参加資格には「石文化に関係する団体」が、そして連携内容については「当会のホームページに、団体名を掲載、メーリングリストや会報による情報交換、各地域でのイベントの協力体制構築、伊豆石の写真や情報の提供の依頼」の4点があげられている。2021年4月時点では、パートナーシップの実績はない。しかしながら、2021年度における探究会の事業計画で、毎月の例会において「石文化に関係する団体との意見交換会」の実施を掲げている。方法は、石文化に関係する団体の主たるメンバーにWeb会議に出席してもらい、団体の紹介や石に関連した報告をしてもらうというものである。その第一弾として、5月にNPO法人大谷石研究会理事長の塩田潔氏により、大谷石に関する講義とディスカッションが実施される。また6月には伊豆石文化探究会のメンバーが宇都宮市に訪れ、本共同研究メンバーとNPO法人大谷石研究会の主だったメンバーで交流会が実施される予定である。

以上のように、探究会では他団体とのネットワーク構築と情報交換、人的交流を通して、自らの研究や活動のノウハウを蓄積するだけでなく、全国の団体と連携した石文化の発信を目指している。

4 「全国石のまちネットワーク」の形成の必要性

4.1 失われつつある石の景観

石はどのような魅力や可能性を秘めているのであろうか。それは石の土着性であると考えられる。木材と石材を比較した場合、木材は軽く、移動性に優れているが、石材は重く、遠方への輸送には不向きである。そのため石材は、極力近場での産出・利用となり、地域特有の景観が生み出される。しかも、木材のように、似通った風合いや質感ではなく、含有成分や生成時期・時間、地点によって質感、質量、配色が異なる。石材は、地域の独自性を生むには絶好の資源なのである。今後のまちづくりで重要なことは、その地域の独自性を如何に見出し、守り育てていくことであ

ろう。急激な経済成長が望めない定常化時代において、他の地域と差別化すること、すなわち地域独自の文化や芸術といった内面を磨いていくことが、将来的な地域発展の糧となるからである。筆者が大谷石に強い関心と地域活性化の可能性を見出したのは、以上の理由であった⁹⁾。

コンクリートの普及が進み、石の利用や景観が年々減少している。筆者は、仕事で東京の山の手地域を訪れることがしばしばあり、時間をみつけては路地に入り、住宅地の様子を観察している。そのときに感じるのは、近世江戸を伊豆石が造ったとするならば、近代東京は、大谷石が造ったといえる。特に関東大震災以後、急速に東京の市街地が郊外に広がる過程において、コンクリートが普及していない時代、山の手地域の開発には、石の土留めが必要不可欠であった。今後より詳細な調査が必要であるが、かつてこれらの地域では多くの土留めや塀に大谷石が利用されたと考えることができる。現在でも、東京の山の手地域や1970年代ごろまでに開発された郊外住宅地の土留めや塀は、かなり大谷石が残存している。その一方で、築年数が新しい住宅においては、建て替え時に土留めや塀をコンクリートや擬岩に置き換えるものも多く、大谷石は減少の一途を辿り、現状において東京から大谷石の景観が消えゆくのを待つのみである。

大谷石の景観が失われつつあるのは、大谷石の産地である宇都宮でもまた同じである。かつての宇都宮は、大谷石が至るところに利用され、独特の景観を形成していたという。近年開発された住宅地では、大谷石を塀や土留めに利用するケースはほとんどない。行政の補助や石材業者、建築士などの努力によって、新築住宅の壁面の一部にタイル状の大谷石を貼るケースは散見されるが、消えゆく大谷石構造物の面積に比べると微々たるものである。2018年に大谷石の文化が日本遺産に認定されたことも重なり、市や県でも地場石材の利用促進や景観保護、認知度向上に努力している。それでも大谷石の景観はかなりのスピードで失われている。日本に誇る石の街宇都宮の原風景が失われ、日本中どこにでもある、無味乾燥とした風景に変貌しつつある。現在、宇都宮は地域活性化、まちづくりの大きな資源を失おうとしている。座したまま何もせずに大きな文化資源を失うのか。それとも市民がそれに価値を見出し、守り育てていくのか。今まさにその岐路に立たされている。

4.2 石のまちの連携

2021年2月の視察のきっかけとなったのは、2019年12月に宇都宮市で開催された「日本遺産『大谷石文化』石のまち宇都宮シンポジウム」であった。このシンポジウムでは、大谷石、日華石（石川県）、北木石（岡山県）、札幌軟石（北海道）、房州石（千葉県）の報告とパネルディスカッションが行われた。参加者は、栃木県内の市民にとどまらず、全国の石でまちづくりを行おうとする団体や個人が集い、シンポジウム後の懇親会も盛り上がりを見せた。その中に伊豆石文化探究会のメンバーも加わっていたことが、今回の視察のきっかけとなった。また、シンポジウムに先立って、2019年6月に小樽、札幌を訪れ、小樽軟石および札幌軟石でまちづくりを行う団体との交流も、以下で示す石のまちによるネットワーク形成のヒントとなった。

これら2つの経験から「全国石のまちネットワーク」なる組織を早急に設立し、調査・研究における情報交換、石文化の発信を推進するべきと考える。その理由は、第1に相互の情報交換の

重要性である。札幌や小樽、そして探究会のメンバー、さらには2019年のシンポジウムで訪れた各団体のメンバーに共通するのは、とにかく石や地域に対し強い愛情を抱いている点である。石や地域のことを話し始めると尽きることがない。探究会のFacebookの投稿や例会がそうであるように、まちづくりや地域活性化が表向きの目的ではありながら、内心所属メンバーのほとんどは「自分が楽しいから」活動をしている。これは利益を伴わないまちづくり活動にとってキーポイントである。同じような視点や方法でまちづくりを考え、汗をかいている仲間が、地元だけではなく全国にいたることが大きな励みになり、活動継続の糧となる。

2つ目に、相互の比較である。他の石材との生成過程や見た目、利用の文化・歴史について比較したとき、はじめて各石材の特殊性を見出すことができる。その特殊性を見出すことが、各地の石文化に価値を与え、地域の人たちの誇りとなる。また相互の比較は、地域間のライバル心を芽生えさせ、石文化発展の原動力になっていく。

3つ目は、石文化の重要性を日本中に発信できることにある。これは前章で紹介した伊豆石文化探究会の公式ウェブページに記載されていたことでもある。石の文化が日本遺産に認定されている宇都宮でさえも、市民の大半は本質的に石文化の価値に気が付いていない。市民に石文化の価値について知らせようとするとき、もはや地元内で活動には限界があると言わざるを得ない。それならば全国的なネットワークを築き、全国から石文化を発信することで、地域に石文化の価値について伝える方がはるかに効率的かつ効果的である。

各地で他の石のまちを巻き込んだシンポジウム開催や書籍の出版、視察等でのつながりが生まれてきた。新型コロナウイルス感染拡大の恩恵として、ZoomなどによるWeb会議が普及、一般化しつつある。これを好機と捉え、伊豆石文化探究会のネットワーク構築事業が広がりを見せることを願い、探究会などに対しできる限りの協力をしていきたい。2021年5月のNPO法人大谷石研究会¹⁰⁾との交流がそのための行動第一弾となる。その意味でも、法人格を有し、会員数100名を超えるNPO法人大谷石研究会の持つ役割と可能性は大きい。当会が全国の石のまちと宇都宮をつなぐハブとなり、宇都宮や大谷の魅力を全国に、そして全国から発信していきたい。

【注】

- 1) 2015年からはじまった日本遺産の認定制度では、「『珠玉と歩む物語』小松?時の流れの中で磨き上げた石の文化?」(2016年4月25日認定)を皮切りに、「星降る中部高地の縄文世界—数千年を遡る黒曜石鉾山と縄文人に会う旅—」(2018年5月24日認定)、「旅人たちの足跡残る悠久の石畳道—箱根八里で辿る遥かな江戸の旅路」(2018年5月24日認定)、「400年の歴史の扉を開ける旅?石から読み解く中世・近世のまちづくり 越前・福井?」(2019年5月20日認定)、「知ってる!?悠久の時が流れる石の島?海を越え、日本の礎を築いた せとうち備讃諸島?」(2019年5月20日認定)、「八代を創造した石工たちの軌跡~石工の郷に息づく石造りのレガシー~」(2020年6月19日認定)というように、104件の日本遺産のうち、石に関連したものが少なくとも7件認定されている。
- 2) 2021年2月19~21日に行った伊豆石文化探究会代表の剣持氏への聞き取りによる。

- 3) 2021年2月19～21日に行った伊豆石文化探究会代表の剣持氏への聞き取りによる。
- 4) 住まい工房とうくり HP (<https://www.toukuri.biz>) 2021年4月20日閲覧
- 5) 日本経済新聞 2006年2月11日
- 6) 日本石材工業新聞 2017年4月7日
- 7) 伊豆石文化探究会公式 Facebook より
- 8) <https://izustonequest.wixsite.com/japan> (2021年4月20日閲覧)
- 9) 宇都宮市やその他の地域における大谷石の景観やその可能性について言及した塩田 (2018) では、宇都宮の風景におけるヴァナキュラー (土着的) な素材として大谷石をあげている。
- 10) 筆者は、当会の会員であると同時に理事を務めている。

【参考文献】

- 宇都宮市 (2020) 『市政に関する世論調査結果報告書—第53回 令和2年度—』宇都宮市。
- 金子浩之 (2007) 伊豆石. 『季刊考古学』第108号, pp.42-45.
- 金子浩之 (2015) 江戸へ運ばれた石材と近世史上の位置. 江戸遺跡研究会編『江戸築城と伊豆石』 pp.227-261, 吉川弘文館.
- 塩田 潔 (2018) 大谷石の風景・大谷石の文化—未来へ. 『市政研究うつのみや』第14号, pp.91-96.
- 静岡県教育委員会編 (2015) 『静岡県文化財調査報告書大66集 伊豆半島の石丁場遺跡』静岡県教育委員会文化財保護課.
- 島津光夫 (2007) 『日本の石の文化』新人物往来社.
- 杉山宏生 (2015) 西相模・東伊豆の安山岩石丁場. 江戸遺跡研究会編『江戸築城と伊豆石』 pp.33-56, 吉川弘文館.
- 丹治雄一 (2019) 近代洋風建築に使用された石材「白丁場石」の歴史. 高田祐一編『産業発展と石切場—全国の採石遺構を文化資産へ—』 pp.81-93. 戎光祥出版.
- 土屋和男 (2020) 近代初等における天竜川下流域の治山と木材流通材木と伊豆石を巡って. 『常葉大学造形学部紀要』18号, pp.19-27.
- 町田 洋・松田時彦・海津正倫・小泉武栄編 (2006) 『日本の地形5 中部』東京大学出版会.
- 安森亮雄 (2019) 栃木県宇都宮市の大谷石—産業・建築・地域における行きたれた素材—. 高田祐一編『産業発展と石切場—全国の採石遺構を文化資産へ—』 pp.43-57. 戎光祥出版.
- 吉野清史 (2020) 大谷地区の基礎的研究 (3)—大谷石産業の変遷—. 『都市経済研究センター年報』第20号, pp.183-190.